

公開講演会

島から考える日米関係

矢口 祐人

(東京大学大学院総合文化研究科 教授)

【矢口先生】

今日は「太平洋の島々から考えるアメリカ」ということで、1時間ほどお話を
して、フロアからコメントなり質問なりをいただければと思います。

今年の4月8日、天皇皇后が、羽田空港からパラオという島に行きました。宮
内庁のHPによると、その際にこんなことを述べています。

本年は戦後70年になります。私どもはその節目の年にあたり、戦陣に斃れ
た幾多の人々のことを思いつつ、パラオ共和国を訪問致します。パラオ共和
国はミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国とともに、第一次世界大戦ま
ではドイツの植民地でしたが、戦後ヴェルサイユ条約及び国際連盟の決定に
より、我が国の委任統治のもとに置られました。そしてパラオには南洋庁が
置かれ、我が国から多くの人々が移住し、昭和十年頃には島民の数より多い
5万人を超える人々がこれらの島々に住んでおりました。終戦の前年にはこ
これらの地域で激しい戦闘が行われ、いくつもの島で日本軍が玉砕をしました。
この訪問に際し、ミクロネシア連邦及びマーシャル諸島共和国の大統領ご夫
妻が私どものパラオ国訪問に合わせてご来島になり、パラオ国大統領ご夫妻
ともにペリリュー等にご同行して下さることに深く感謝しております。

これがそのときのパラオの様子です。島民が歓迎しているのがわかります。また
別の写真にはパラオの大統領夫妻とともに、ミクロネシアの大統領夫妻とマー
シャルの大統領夫妻が来て、天皇皇后と並んでいます。

さて、10年前の6月に、天皇皇后はパラオの近くにあるサイパン島を訪問して
います。そのときにも長いスピーチをしています。その一部は以下のとおりです。

サイパン島は第一次世界大戦後、国際連盟のもとで日本の委任統治に置かれ…沖縄県民をはじめとする多くの人々が島に渡り、島民と共にサトウキビ栽培などをしてサイパン島も豊かな暮らしをして、発展してきました。しかし先の大戦により、この平和な島の姿は大きく姿を変えました。亡くなった日本人は5万5000人、その中には子供を含む1万2000人の一般の人々がいました。同時にこの戦いにおいて、米軍も3500人近くの戦死者を出しました。島民は幼児を含む900人が犠牲になりました。

ここは(写真)、1944年の6月に、アメリカ軍に追いやられたサイパンの日本人の多くが身を投げて死んだと言われる場です。通称バンザイクリフと呼ばれる所ですが、お二人はここに行って頭を垂れたわけです。

近年、天皇皇后は熱心に旧南洋植民地を訪れています。ところが私が教えている東京大学の1年生、2年生に旧南洋植民地のことを聞くと、驚くほど限られた知識しか持っていません。同志社大学のみなさんはどうでしょうか。高校の日本史や世界史で、南洋植民地のことを勉強したって覚えている人、どれほどいらっしゃいますか。そうですか、やはりあまりご存知ないですね。

今日話すことと関係しますが、これは知らない皆さんが悪いわけではなくて、日本の戦後の教育が見事なまでに旧南洋植民地の記憶を周縁化しているからだとは考えています。教育が生み出す歴史の記憶の形がものすごく効果的に、日本の南洋における植民地史を消してしまっています。実は日本は1945年まではすごく大きな植民地を有していました。パラオ、ミクロネシア、マーシャル、この辺りは全部、日本が植民地としていました。私たちの知っている今の日本地図はこういうものですが、当時の地図に描かれている日本はものすごく巨大です。とくにこの辺りの広大な地域は日本領でした。このことを天皇皇后は覚えていて、サイパンに行き、そして今回はパラオに行ったわけです。ここがミクロネシア、マーシャルですけど、ミクロネシアとマーシャルの指導者がパラオまでやってきて、三国そろって天皇皇后を迎えているのはそういう過去の歴史と深く関係しています。しかし日本でこのニュースを見た人のほとんどは、「へえ、パラオに行ったんだ」と思うくらいで、そこになぜ他の国の首脳までやってきたかまではおそらく考えないでしょう。

さてこういう過去をふまえて皆さんに質問したいのですが、日本が植民地としていたこれらの南洋諸島は今どうなっているでしょう。おわかりの方はどれくらい、いるのでしょうか。

パラオはパラオ共和国、ミクロネシアはミクロネシア連邦、マーシャルはマーシャル諸島共和国です。なお、サイパンは北マリアナ連邦です。そして北マリア

ナ諸島の一番南の島は北マリアナ連邦に入っていないくて、単にグアム島と呼ばれることが多いです。

さて、パラオ、ミクロネシア、マーシャルはそれぞれ独立国です。国連にも加盟をして、一票を持っています。その一方でアメリカと自由連盟（Compact Of Free Association）という契約を結んでいます。これは为什么呢。戦後アメリカが、国際連合によってこれらの地域の委任統治を任されていたのですが、それぞれを独立させる代わりに契約を結んだんです。独立と言っても小さな国ですから、アメリカからの財政援助が不可欠です。でも、アメリカはただで金はくれないですよ。どこの国でもそうですけど、善意だけでどうぞなんて言わないわけです。じゃあ見返りに何を求めるのでしょうか。なんだと思いますか。はい、そうですね、当然基地ですね。これらの島々は軍事的に重要な地域にあります。アメリカはその契約で、あなたたちは軍隊を持たなくていい、我々が守りましょうと約束したんです。守ってあげると言えば聞こえはいいけど、それはつまり、私たちが防衛を担うからあなたの所には当然基地を置かせてねということになります。ですから、マーシャルにもミクロネシアにもアメリカの基地がありますし、パラオにも作ろうと思えば作れるような体制にある。さらに、これらの島では通貨もアメリカドルなんです。マーシャルに行くとアメリカドル、パラオに行ってもアメリカドル、ミクロネシアに行ってもアメリカドルを使います。またこれらの国の国民は、アメリカの軍隊に入隊することができるんです。これはミクロネシアの写真なんですけど、ミクロネシアの人たちがアメリカの軍隊に入る儀式です。アメリカ軍というのは「アメリカ人」だけが入っていると思いがちななんですけど、こういうパラオとか、マーシャルとか、ミクロネシアの国籍を持っている人々も随分入っています。実際、ミクロネシアの国民の入隊率というのは、アメリカの国民の入隊率の二倍以上と言われています。どうして違う国の軍隊に入るのでしょうか。皆さんは違う国の軍隊に入りますか。じゃあ、なぜでしょう。市民権を得るため？ そうかもしれないですね。あとはどうして軍隊に入りたい？ そう、お金です。給料がもらえるからです。これらの島々は経済的に疲弊していて、若い人たちのチャンスは多くない。そうすると軍隊がひとつのキャリアになります。若い男性の多くはアメリカ軍に入って、ドルで給与をもらって、あわよくばアメリカの大学に行き、その後はアメリカの企業で働いてアメリカに家を持つ。そんな夢を持ちます。実は軍隊に行かなくても、アメリカの大学には行けます。とくにこれらの島々の住人は、アメリカ人が得る奨学金、日本でいえば学生支援機構に当たるものを給付される権利を持っています。また一部のアメリカの大学は島出身の学生を特別扱いしてくれます。たとえばハワイ州立大学で学ぶ場合、授業料は普通、州外の人には州民の3倍ぐらいなのですが、島民は1.5倍だけ

で済みます。概してアメリカとの契約により、これらの国々の人は、かなり容易にアメリカに行けるようになってきました。仕事をすることも可能です。ただしアメリカ政府はかれらのことを「移民」とは分類しません。イミグラントではなくて、ノンイミグラントとされます。つまり非移民という移民なんです。実際にマーシャルの人たちがいっぱい住んでいる地域とか、パラオの人たちがたくさん住んでいる地域がアメリカにはある。となると、これらの島々はほんとうに「独立国」なのでしょうか。国連に加盟しているくらいですから立派な独立国ではありますが、実態はアメリカの属国じゃないかと言う人もいます。

じゃあ、北マリアナはどうでしょう。日本でいちばん知られているのはサイパン島です。サイパンにいらしたことがある方はどれくらいいらっしゃいますか？サイパンは一時期、日本人にすごく人気を呼んでいましたが、最近はグアムにおされちゃって、今は直行便もほとんどなくなっています。このサイパンのある北マリアナ諸島は自治連邦（Commonwealth）などと訳されますが、独立国ではないんです。したがって国連には加盟していない。知事がいて、議会もあるんだけど、軍事、移民法、労働法はアメリカ連邦議会のもとにあります。ある時点までは、移民法と労働法は独自で制定することが許されていたんだけど、ここ十年ぐらいアメリカ議会の力が非常に強くなって、全てアメリカ連邦議会がコントロールするようになってきました。住民はアメリカの国籍を与えられます。連邦下院議会に代表を送ることもできますが、議員に投票権はありません。委員会レベルでの投票はできるんだけど、連邦議会での投票は許されません。アメリカには上院議会があり、各州からふたり選出されますが、マリアナの代表は入っていない。そして、アメリカの大統領選の投票もできない。アメリカ人なんだけど、大統領を選べないんです。住人はアメリカ国籍なんだけど、議会に代表を送れないし、大統領を選ぶこともできない。実は同じような状況がプエルトリコにも当てはまるわけですね。

もうひとつはグアム。グアムは北マリアナのようなコモンウェルスですらありません。色んな呼び方があるんですけど、未編入領土、つまりアメリカ政府の管理下にあります。これまでアメリカ政府の管理下にある土地っていうのは、ある一定の人口が増えると必ず州になってきました。それでアメリカは50の州になったんですけど、グアムは州になる可能性がないアメリカの領土と言われています。島民は当然アメリカ国籍です。知事もいて、議会もあり、サイパンと同じく連邦議会の下院に代表は送れるけど投票権はない。大統領選で投票することができない。こういう島はサモアのように他にもあります。国といいながらも、国なのか。あるいはアメリカの国の一部なんだけど、大統領を選べないくらいなのだから、アメリカなのか。

今日の話は、「島から考える日米関係」ということですが、ひとつの大きなテーマとしては旧南洋植民地、つまり日本が持っていた植民地が、今アメリカの傘のもとにそのままあるという現実を考えることです。日本が持っていた広大な植民地は、そのままの姿でほぼアメリカが受け継ぎ、アメリカの傘の下にあります。国であったり、自治政府であったり、領土であったりします。

考えてみれば戦前、戦中、戦後の日米関係というのは、多分にこれらの島をめぐる関係でした。私たちは「日米関係」という表現を聞いた際、日本があり、太平洋があり、アメリカがある。つまり両国が向かい合うように思いがちですが、間にある太平洋という海にはいっぱい島があります。日本とアメリカの関係というのは戦前、戦中、戦後にかけて、往々にしてこの島をめぐる議論でした。その最たるものが戦争なんですけど、ある意味、アジア・太平洋戦争っていうのは、島を巡る闘いでした。日本はアメリカを直接攻撃したのではなく、ハワイという太平洋におけるアメリカの領土を攻撃したわけです。アメリカだって突然やってきて日本を攻撃したわけじゃありません。太平洋の島々を移動しながら日本に近づいてきました。日本もアメリカもこれらの島々を自らの権益、利益の源とみなして、それらを支配しようとする過程で様々な軋轢が起こり、戦いがあったわけです。その際、島の視点や島民の主体性というものは忘れられ、島の犠牲の上に成り立つ日米関係が戦前も戦後も出来上がってきました。つまり、繰り返しますが、日本の旧南洋植民地は今日、アメリカの傘の下にある、つまり日本の植民地がアメリカの植民地の接ぎ木みたいになっているんです。だから日米が島々に対して持つ共通の歴史とか視点を考えるべきだと考えます。日本とアメリカは決して二項で考えられるものではなく、別の視点から捉える努力が必要です。島々から見ると、20世紀の歴史には連続性があり、日米戦で誰が勝ったとか、負けたとかは我々にとってほど重要ではありません。なぜなら、広義の意味での「占領」は終わっていないからです。

今年は戦後70年とすごく騒がれています。7月、8月になれば終戦70周年。9月になれば無条件降伏から70周年。ずっと70周年特集が続いています。でも70周年というのは、誰にとっての70周年なんだろうか。何の節目なのかということをも改めて考える必要がある。つまり、70周年と言ったときのその「70」を記念する視点というのは、どこからきているのかをもう一回考えてみましょう。そのためには、島の視点というのは重要です。

さて、これまで主に旧南洋植民地の話をして、日本の植民地がほぼそのままア

メリカの傘の下に入ったという話しをしました。ここからはそれ以外の島に目を向けてみましょう。旧南洋植民地ではない島々を見て、日米関係を考えてみます。

一つはカホオラヴェ島という島です。二つめはハウランド島。三つめはミッドウェー島。四つめがアッツ島。この四つとも知っている人はいらっしゃるでしょうか？二つぐらいは聞いたことあるかもしれません。高校の日本史、世界史を勉強していた人は、ミッドウェーは聞いたことあるかもしれませんね。アッツを聞いたことある人いますか？手が挙がった方々の年齢層はちょっと高めですね（笑）。ではハウランド、カホオラヴェを聞いたことがある人はいますか。ハワイのことをよく知っている人は、カホオラヴェのことはご存知だと思うんですけど、ただ観光に行っているだけだとなかなか聞かないですね。これら四つのお話しをしてみます。繰り返しますが、旧南洋植民地とは関係のない島々です。その歴史を振り返ってみましょう。

まず、カホオラヴェ島です。これが飛行機から撮った写真ですが、細長い島です。ハワイの地図をご覧頂ければわかりますが、ここにオアフ島があり、有名なワイキキのあるホノルル市があります。いちばん東はビッグアイランドと呼ばれる火山がある島です。オアフとビッグアイランドのあいだに人気観光地でもあるマウイ島があります。少し離れたここにカホオラヴェ島があります。ハワイにヨーロッパ人が渡来するのが1778年、それまでハワイは基本的に外界との接点はありませんでした。しかし世界地図に含まれるようになると、ヨーロッパから色んなものが入ってきました。カホオラヴェ島にもたくさんのもものが到来しましたが、なかに動物がいました。山羊、牛、馬、羊。もともとハワイには牛も馬もいませんでした。どうしてヨーロッパ人はわざわざ牛とか馬を連れてきたのでしょうか。そう、食べるためですね。自分たちが食べたかったんです。当時は帆船の時代ですから、太平洋の海をヨーロッパの船がずっと航海しています。そういう船にとって、ハワイは食糧や水の補給基地としてすごく便利な場所にありました。しかしハワイの先住民が食べていたタロイモなどは、ヨーロッパ人は食べたくなかった。むしろ肉を食べたい。だから牛を連れてくるわけです。牛を連れてきて繁殖させて、その肉を塩漬けにして、船で持っていくようにしたかったんです。だからカホオラヴェ島をはじめ、ハワイの島々に牛が連れてこられます。ハワイには牛の天敵になるような動物もなく、草も抱負だったので、牛はどんどん増えていきました。すると牛をまとめる人、カウボーイが必要になります。そのカウボーイには馬が必要です。このように牛の飼育が本格化し、広大な牧場が作られました、その結果、自然環境がものすごい勢いで破壊されていきました。ハワイのここ200年の歴史というのは、基本的に自然環境の破壊の歴史なんですけど、馬とか牛はすごく自然に悪いんです。全部食べちゃうから。あつという間にカホオラ

ヴェの景観も変わってしまいました。

さて、周知のとおり、1941年の12月に日本軍はアメリカに攻撃を仕掛けます。ホノルルからちょっと離れたパールハーバー、真珠湾を突然攻撃して、2400人ぐらいの人々を3時間弱の攻撃で殺してしまいます。案の定、そのあと日本とアメリカは戦争を始めます。するとアメリカは海軍を訓練して強化するために、カホオラヴェ島を演習場にしました。艦砲射撃の訓練です。船から砲弾を打ち込むんです。沖縄でもサイパンでもそうなんですが、アメリカ海軍は、兵士を上陸させる前にどんどん砲弾を島に打ち込みました。沿岸部を徹底的に破壊してから上陸するんです。そのための訓練の場がカホオラヴェ島でした。しかも日本との戦争の間のみならず、1990年まで続きました。1970年ぐらいから、ハワイの先住民の人たちが「カホオラヴェ島は我々にとっても大事な所だから、そんなことは止める」と言いだし、20年ぐらい抗議運動が続けられました。ようやく1990年に爆撃が停止されて、この演習は行われなくなりました。島はハワイ州に返却されたのですが、戻ってきても50年間爆弾の嵐が降った島は容易には入れません。すごく危ない。それを今、一生懸命きれいに行っているんですけど、膨大な時間とお金がかかっています。だからいまでもあまり入れません。一部のきれいになった所を、ハワイ先住民の歴史と文化を再生するための特別な場所にしようという動きが非常に強くなっています。でも、島全体はまだ使える状態にありません。ですから皆さんがハワイに行って、「誰も行ったことがない島だから行ってみたい」と思っても、かなり難しいです。

次はハウランド島、これはさすがに皆さんのほとんどが知らないと思いますけど、ハワイから南西に3100キロ、赤道の少し上にあります。一見、何もない所なんですが、1857年からアメリカが領有を主張しています。その根拠となったのはグアノアイランドアクトという法律です。要するに他の国が領有権を主張しておらず、他の国の国民の居住していない島に「グアノ」があればアメリカの領土とすることができるという法律です。

ではこのグアノとは何でしょう。そう、リンです。リンといっても、要は鳥の糞です。太平洋には鳥がいっぱいて、鳥が集まる無人島がたくさんあります。その鳥が糞を落とし、何百年にわたって積まれていくと、すごい量になるわけです。これがリンとなり、とても重要な資源になります。すごくいい肥料になります。だから19世紀のアメリカは必死になってグアノを探していました。ゴールドラッシュならず、グアノラッシュという表現すらありました。アメリカの歴史を学んだ人は、19世紀のアメリカというのは、西へ西へと拡大していったと教えられたと思います。西へ拡大していくというのは農地を作るということでした。土地を切り開いて、農地を作る。でも農地を作るには、肥料が絶対必要です。そのため

にはグアノがよかった。ですからアメリカ人は、世界中でグアノを探し回って来ました。すると太平洋の島々にグアノがあったわけです。これをアメリカのものにしたかった連邦政府は、グアノのある島で他国が領有を主張していなかったらアメリカのものにしちやおうと決めたのです。その結果アメリカのものになった島はけっこうあります。ハウランド島からそう離れていないジャービス島やジョンストン島がその例です。これらの島はグアノが採掘されて、取れなくなった後も、アメリカの領土のままでした。「ひどく勝手な法律だな」と思うかもしれませんが、考えてみたら、無人島が誰のものかっていうのはすごく難しいんです。ここには法律の先生もいらっしやると思いますが、誰も住んでいない島は誰のものでしょう。これは現代の政治とも密接に関係してきます。今でも中国のものだ、韓国のものだ、日本のものだと、皆がすごく感情的になってけんかしている島があるわけですが、実は誰も住んでいないわけですから誰のものでもないだろうとも言えます。どうして国が島を領有すると主張できるんだろう。こんなアメリカから8000キロも離れている島を、鳥の糞があるからといってアメリカが領有しちやあってよいのでしょうか。

ハウランド島は他の国も領有を主張しようとしたけれど、アメリカは頑として手放さず、1936年に当時のアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトが大統領行政命令を出して、ここはアメリカだと強く宣言します。

さらにハウランド島の領有を明確にするために、当時のアメリカ政府はそこに人を置かなければいけないと考えました。つまり、ただ単に領有を宣言していても充分ではないから、アメリカ人を配置しようとしたんです。けどすごく小さい島でもともと誰もいないところに誰を送るのが問題になりました。その際、ハワイに近いから、ハワイ先住民を送ろうということになりました。3000キロも離れているんですけど、強いていえばハワイが近いだろうと。ハワイにはカメハメハスクールというハワイ先住民が勉強する高校があるんですけど、そこの卒業生の男の子たちに声をかけて、半年ローテーションで、4人1組を島に送って、頑張っって生活させました。これが当時の写真です。暑い所だけど、ハワイアンだから大丈夫だろうというのがアメリカ政府の判断です。無茶苦茶な論理ですけど、ある程度の缶詰や水を与えて、自分たちで留守番しているあいだは飛行場を作るように指示しました。当時は飛行機の時代の幕開けですから、飛行場を作らせたんです。ちょっと余談ですが、この頃、アメリカにはアメリア・イアハートというすごく有名な女性パイロットがいました。彼女は世界一周を企てていました。ちょうどここが太平洋の真ん中で便利な所だから、イアハートが着陸して燃料を補給する場としても、飛行場が作られたんです。でも彼女は来ませんでした。ハウランド島に到着する前に行方不明になってしまい、未だにどこに行ったのかわ

かっていません。

さて、ハワイ先住民の若者たちが島にいますと、1941年12月8日に突然上空に飛行機が現れました。戦争が始まったからです。真珠湾攻撃の翌日に、日本の飛行機がこの上空にやってきたのです。日本はこの島に飛行場が作られていることを知っていたわけです。そしてこの飛行場は、日本が旧南洋植民地として持っていたマーシャル諸島から近かったんです。となると、日本は当然ここを叩きたくなります。突如として現れた日本の航空機はハワイ先住民の若者たちを攻撃し、そのうちのふたりが命を落としました。彼らは何が起きているかも知らないうちに殺されてしまったのです。これが当時の写真ですけど、日本軍が攻撃した跡です。今はこんな風になっているらしいですけど、基本的に誰もいない。アメリカの連政政府の人が定期的に入っているらしいですけど、アメリカ合衆国の未編入領土という形で、アメリカが領有を宣言しています。アメリカ、ハワイ、日本の歴史が、こんな所でも複雑に絡み合っているわけです。

三番目の話として、北西ハワイ諸島の話をして。ハワイというのは地図で見せましたが、我々が行けるのは東のビッグアイランド（ハワイ島）から西のカウアイ島までです。先ほども説明したようにカホオラヴェ島には行くことができませんが、その他の島は基本的に行くことができます。カウアイ島の西にも島がありますが、このニイハウ島というところは私有地なので観光客は原則行けません。我々のハワイ観というのはこれら観光客が行ける島で創られているわけです。しかし実はハワイってもっと長いんです。我々がリゾート目的で行けるハワイの何倍もの長さに渡り、数多くの島々が日本に向かって伸びています。この行けない部分だけで大体1500キロあると言われてます。

これらの島々は、僕はいつも発音で失敗するんですが、パパハナウモクアケア・ナショナルモニュメントに指定されています。ナショナルモニュメントは日本語に訳すのが難しく、定訳があるのかも分かりません。「モニュメント」は辞書で見ると記念碑などと訳されています。しかし実際には記念碑ではなくて公園に近いものです。「国立公園」という感じでしょうか。だけれども、国立公園っていうのは人びとが訪れて楽しむことができます。しかしこのナショナルモニュメントは一般の人は入れない。誰も近づけない。誰も入ることが許されない公園です。

パパハナウモクアケア・ナショナルモニュメントは2006年にジョージ・W・ブッシュ大統領によって設けられました。ブッシュ大統領は一般的には環境保護団体から極めて評判が悪い大統領でしたが、これについては今日まで高く評価されています。指定した意図は様々あったと思うんですけど、とにかくここを誰も近づけないようにした。全部の面積を合わせると日本の面積とあまり変わらないくら

いの広大な地域です。アメリカにある全ての国立公園を足したものより広い面積です。グランドキャニオンなどのアメリカの国立公園に行ったことある人は分かると思いますけど、それぞれが巨大なわけですが、それ全部足してもこれより小さいわけなので、規模が想像つくでしょう。そういうところが、専門家などの例外を除いては誰も近づけない聖域となったんです。そこにはものすごくたくさんの鳥、魚、植物などがみられます。生物のパラダイスです。生態学者、生物学者が泣いて喜ぶような状況になっているわけです。

素晴らしいじゃないか、手つかずの自然が残っているに違いないと思うかもしれませんが。しかしここにも日本の歴史と社会が関わっています。たとえば、アホウドリっていう鳥がいます。その昔日本ではアホウドリ捕りが盛んでした。19世紀から20世紀の初めにかけて、ヨーロッパでは鳥の羽をつけた帽子とかすごく流行ったんです。羽毛はすごく価値がありました。とりわけアホウドリというのは、羽を広げると人間の身長よりも大きいほどの鳥で、すごくきれいな羽を持っているんです。これをヨーロッパに輸出することで大儲けした日本人がたくさんいました。日本にも南鳥島という島がありますが、そこにもアホウドリがいました。

アホウドリの羽を狙った人たちは動物愛護などとはほど遠い感覚の持ち主でした。アホウドリっていうのはあまり警戒心がなくて人が近づいても逃げないと言われます。それを次々と殺し、羽だけ捕っていました。極めて残酷な方法ですし、鳥はそんなことをすればすぐにいなくなります。日本人は北西ハワイ諸島にもアホウドリがたくさんいると聞き、何人もがこのあたりのリシアンスキー島、レイサン島、ミッドウェー島などにやってきました。殺した鳥の数は三十万羽とか四十万羽などと言われていますが、正確な数値はわかりません。とにかく大量に殺して、ヨーロッパに輸出して儲けようとしていました。しかしアメリカ政府としてはこんな所で日本人が鳥を捕っていると気が気でならない。もしかしたら日本人がこの島を取ってしまうきっかけになるのではないかということまで心配するわけです。随分外交交渉をやって、最終的には日本人を追い出すわけですが、その過程で、アホウドリを守るための法律などもアメリカで作られました。これが今のナショナルモニュメントにもつながっているわけです。つまり、ジョージ・ブッシュのナショナルモニュメントの起源をたどれば、日本人がアホウドリを必死になって捕っているところにたどり着くという感じです。

もうひとつはミッドウェー島です。北西ハワイ諸島の一番西にミッドウェーがあります。日本でも知られているのは、1942年に日本とアメリカがこの沖で大きな戦いをしたからです。そして日本が負けました。1941年の12月から翌年6月までにかけての日本は快進撃を続けていて、色んなところで勝利をするわけで

すけど、このミッドウェーでの敗北のあとはだいたい駄目になっちゃいます。でも考えてみれば、なぜなぜそんな所で戦ったのでしょうか。

これは当時のミッドウェーの写真ですが、ご覧のように島のほとんどが滑走路です。つまり、ここにアメリカ軍は基地を作っていました。潜水艦の基地もあり、日本は気になってしょうがないわけです。地図で見ればわかるように、かなり日本に近い。そんなところにアメリカの基地があるのはとても心配なわけです。だから何とかしてミッドウェーを取ろうとしたが、負けたわけです。

今日は基地もなくなり、こんな感じなんですね。さまざまな建造物は残っているけど人は基本的にはいなくて、アホウドリをはじめ、数多くの動物でいっぱいです。ただし、日本やアメリカと切り離されているかといえばそうではない。今でもしっかりアメリカ領ですし、ミッドウェーは別の意味で日本をはじめとするアジア諸国と切り離せない縁でつながっています。

あまり気持ちのよくない写真なんですけど、これ、今日のミッドウェーの写真です。驚くことに、誰もいないはずのミッドウェーの砂浜はゴミだらけなんですね。東日本大震災の瓦礫とかアジアのゴミが海流の影響で、誰も行けない、誰も住んでいない島に流れ着いています。それが甚大な環境問題を引き起こしています。例えば百円ライターっていうのは、水に浮いているとアホウドリの親からすると魚に見えるらしい。それを捕って、ひなに与えるわけです。すると当然、ひなは死んじゃう。胃の中を見るとほとんどゴミだらけです。全く人が行けないはずの島に、日本をはじめとするアジアのゴミが大量に流れ着いて、そこで守られるはずの鳥がどんどん死んでいっている。日本とはこういう形でも、ミッドウェーはつながっています。

次が最後の例になりますが、アッツ島です。ここはこれまでの暖かい所から離れていてかなり寒いです。アラスカからロシアに向かってずっと島が続いているんですけど、ここにアッツがあります。ロシアとアメリカの国境はここですので、ほとんどロシアとの国境に近い島です。アッツ島というのはもともと、アメリカが1867年にアラスカをロシアから買ってからアメリカ領になります。日本とアメリカが戦争を始めた後の1942年6月に、この島に日本軍が上陸し、占領しました。アメリカへの攻撃の足掛かりにしようとしたんです。ただじきにアメリカ軍の反撃に遭って、43年にほぼ全滅します。ほとんど全員死亡するわけですが、このことをどういう表現で形容したかという、当時の日本のメディアは「玉碎」という言葉を使いました。玉碎という言葉をご存知だと思いますが、これは戦争中につくられた言葉です。当時の新聞は「日本惨敗！」とは書けないから、玉碎って書くわけですね。その言葉のもととなった島とも言われているのがアッツ島です。

実は日本軍が上陸したときに、アッツ島には先住民がいました。40人とか41人とか言われていますけど、予想外の住人の存在に日本軍は困ってしまいました。そしてこの人たちを日本に送りました。つまりこの先住民たちは戦争捕虜になったわけです。北海道の小樽に送られ、1942年から戦争が終わる45年過ぎまでそこにいました。そのときの待遇は格段悪かったわけではないとも言われていますが、当時の食糧事情からすると全く食べるものも足りず大変苦勞したようです。かれらにとって小樽は湿気が高く、暑過ぎたという話もあります。とにかくさまざまな理由で健康を害した人が多く、41人中20人以上が命を落としたと言われています。さらに、戦争が終わり、ようやく帰れると思ったら、今度はアメリカ軍が故郷に戻してくれませんでした。なぜかと言えば、ソ連との冷戦のなか、ソ連との国境に先住民を帰そうとはしないわけです。したがってかれらはアッツ島よりはずっとアメリカに近いアトカ島というところに戻されました。アッツ島で先祖代々生活していたところ、日本軍が突然やってきて小樽に送り込まれて、戦争が終わったと思ったら、自分の島に帰れず違う島に送られたわけです。

* * *

さて、ここまで四つの島の話をしました。カホオラヴェ島、ハウランド島、北西ハワイ諸島（とくにミッドウェー）、そしてアッツ島。その前に旧南洋植民地の島々の話をしました。太平洋の島々のイメージというと、なんとなく今の日常から切り離されたところという感じがするかもしれません。

たとえば悲惨な戦争があった「過去の島」というイメージが強いのではないのでしょうか。私の知り合いの研究者でマーシャル諸島のことを研究している人がいるんですけども、彼が、昔マーシャル諸島が日本の植民地だったときに住んでいたという日本人のおばあさんにインタビューをしたんですね。そうすると、昔マーシャルに住んでいたって言って、色んな思い出話をするんですけど、「またマーシャルに行きたいですか」って聞いたら、「もうあの島はないの！あの島はなくなっちゃったのよ！」と答えたそうです。つまり、彼女にとってあの島はもう存在しないのです。自分の故郷である島はもう存在しない、なくなってしまった。過去の存在として思い出される、ノスタルジアの対象であり、今は存在しないものとなってしまっているわけです。

あるいは「南の楽園」とか「癒しのパラダイス」というイメージも強くあります。私はハワイの研究をして10年以上になりますけど、大学で「すいません、ちょっとハワイに出張に行ってきます」と言うと、思わず皆さん「いいねえ」と言います。ハワイと言うと、真剣な研究や業務とは連想されない。南の島は日常とは切り離

された楽園、パラダイス、癒しの場というイメージが日本のみならず世界中で見られます。

けれども実際には、今の話から少しは分かっていたと思いますけど、日本とアメリカの間にある無数の太平洋の島々は、さまざまな形で日本とアメリカを結んできた島々です。旧南洋植民地以外の島々も、アジア・太平洋戦争を軸に、日米の影響とか負の遺産が刻印されているところが多い。ハウランド島にしても、カホオラヴェ島にしてもそうです。カホオラヴェがアメリカの海軍に接收されるのは、日本の攻撃が契機となっています。アツツとそこに住む人びとの歴史も日本とアメリカの戦い抜きでは語れません。戦前から戦後へと続く日米関係と、様々な島の歴史と社会の関係を考える必要があります。太平洋の島々の20世紀は日米による占領の歴史であり、戦闘の歴史であり、環境破壊の歴史です。つまり先住民の土地の略奪の歴史であり、さらにそれに対する先住民の適応と抵抗の歴史です。この適応と抵抗は21世紀の今日まで続いています。

それらの島にとって、「戦後70年」という表現はどのような意味があるのでしょうか。戦後70周年が大切なモーメントであるというのは日本ではあたりまえのこととされています。アジア・太平洋戦争は日本の社会にとって、極めて重要な事件だったからです。だから私たちは常に「戦前」「戦後」という表現を使います。1945年以降も世界では数多くの戦争がありました。日本では戦争といえばアジア・太平洋戦争で、その前後で世界が変わったと理解されています。でも太平洋の島々に住む人びとにとって、戦前と戦後で何がどれほど変わったのでしょうか。島が支配され、人びとの土地が収奪されている構造は戦争の前でも後でもほとんど変わっていないとも言えます。日本に住む私たちにとって戦前と戦後のあいだには何かすごく大きな転換があったと思えますが、これらの島々からすると戦後70周年というのは、それはそうなのかもしれないけど、別にたいした変わっていないんです。戦後70周年というのは、「日米にとって」の節目の年です。それまで反目していた日米が、戦争を機に今度は同盟国になった。あるいは、日本で新憲法が公布されて新しい日本社会ができた。そういう意味では画期的かもしれないけれども、日米関係の舞台となった島々、あるいはもっといえば日米関係を作ってきた島々、そして日米関係に翻弄されてきた島々にとって、「戦後の清算」などというのは存在していません。私はこのことが「戦後70周年」という日本やアメリカにおける語りからすっぽりと抜け落ちているのではないかと思います。

天皇皇后のパラオ行きのニュースに接した日本の多くの人びとは、「ふーん。昔、命を落とした日本人の慰霊に行ったんだ」くらいにしか考えません。なぜそこにパラオのみならず、ミクロネシアとかマーシャルの大統領夫妻までもがいて、あそこで一緒に記念写真を撮っているのか。あの構図は日本の植民地の歴史を知っ

ていれば、ちょっとびっくりしてしまうようなものはずですが、そう感じる人はほとんどいません。あの写真を見て居心地の悪さを覚える感覚はどこで失われてしまったんだろうということを、若い学生さんたちにぜひ考えていただきたいと思います。なぜそのような過去を意識しないまま大学生になれてしまったのだろうか。むしろ、知らない皆さんが一方的に悪いわけではありません。他の国では植民地の歴史をすごく教えるところもありますが、日本は旧植民地の歴史をほとんど教えません。平和主義を唱えるいわゆる「左翼」は国内の戦争被害やサイパンでの日本人の悲劇を語るのには熱心ですが、日本が占領していた島々の人の歴史にはたいした関心を示さない。あるいは日本は南洋植民地の開発にかなり力を入れて、それなりの教育制度なども作ったわけで、それは考えようによっては植民地が残した良い意味での「遺産」とも言えるかもしれない。私自身はこういう視点にはあまり賛成できませんが、「右翼」的な考えをする人であれば、そういうことを利用して、「日本の立派な歴史」をもっと主張することもできるんじゃないかとも思います。しかしそういう話も出てこない。右も左もほとんど何も語らないわけです。そういう見事なまでの歴史の周縁化、記憶の周縁化がどこで起こっているのかということ、若い皆さんに考えていただきたいと思います。

今日用意した話はこれくらいですが、最後に追伸があります。ジョン・ダワー先生というMITの名誉教授がいらっしゃいます。ちょっと古い本ですけど、1999年に*Embracing Defeat*（『敗北を抱きしめて』）という本を出されています。翻訳は岩波書店から出ています。そこでダワー先生は日本の戦後を包括的に論じています。日本が敗北を抱きしめる、つまり敗北を受け入れるということだったのか。ダワー先生は日本の戦後の社会というのは、敗者としての日本を考えることで作られてきたとおっしゃっています。そして「そういうような状況では、天皇の聖戦を遂行するためにどれほどの自分たち以外、日本人以外の生活あるいは命が破壊されたか。日本人がゆっくり考えるエネルギー、想像力、欲望を持ち合わせていなかったのは当然である」と指摘しています。あるいは、『きけわだつみのこえ』という非常に有名な、学徒動員された若者の手記をまとめた本が、戦後ベストセラーになりますが、これに対してもダワー先生はかなり批判的で、「注目は彼ら、つまり日本人エリート男性の死であり、彼らが殺したかもしれない人々ではなかった。この限られた戦争観には、日本人以外の犠牲者は存在しなかったのである」と述べています。つまり、敗者としての自分を受け入れることで日本人は日米関係を受け入れ、新しい日本を作ってきた。しかしその構図の中で日本人は「他」を見る目を失ってしまったのではないかという指摘です。これには色んな反論もあると思うし、私も最初読んだときはどうかなと思ったんですが、今回ちょっと読み直して、なるほどとじっくりくる面もあります。戦後

70年というのが繰り返し新聞等メディアで語られるのを見て、ダワー先生への賛意を強くしています。戦争を忘れないことはとても大切なことなのだけれども、いまや戦争を忘れないための時間軸は完全に日本を中心とした時間軸になっているわけです。

そう考えると、これは本当に最後のスライドなんですけど、ここで余計なことを言わせてください。今の沖縄をめぐる議論というのは、実は太平洋の島々のコンテキストでなければ分からないのではないかと思います。沖縄戦ってというのは突然起こったものではなくて、41年のハワイからミッドウェー、アッツ、マーシャル、マリアナ、グアム、パラオなどを経て始まります。こういう経緯を思い出して、沖縄をこれらの島々とともに考えると、もう少し違う視点が生まれるのではないのでしょうか。たとえばハワイは今、ハワイ州になっている。しかしハワイには、ハワイ州になっていることに不満を持っている人はたくさんいます。ハワイも沖縄と同じような「植民地」だと言う人も多い。アッツも、アッツ島の先住民は帰れない。マーシャルは独立国だけれども、その「独立」の意味は難しい。巨大なアメリカ基地があって、そこには様々なアメリカの武器がある。皆さんは第五福竜丸事件というのを知っていると思いますけど、ああいうアメリカが核の実験をするような、核の庭と化してきたわけです。マリアナやグアムはお話しましたし、グアムはアメリカの植民地の最たるものです。パラオもよく分からない。独立国ではありますが、パラオの国連での投票パターンというのは、どの国よりもアメリカと同じだというデータが出ています。全ての島で戦争、帝国、植民地の影が色濃く残り、さまざまな軋轢が残っています。沖縄を巡る問題は太平洋の島々のコンテキストで見るとわかりやすいし、そうしないとその状況は分かりません。例えば沖縄の基地移転問題で、ある時期北マリアナに基地を一部移転させればいいという話があったし、今でもグアムに基地を移転させるのがいいだろうとか、つまり沖縄の外に出してしまえばいいだろうという議論が聞かれます。これは基地反対派の人たちにも多い。私も基地賛成ではないんですけど、基地反対なら他の太平洋の島々に出してしまえばいいというのは、極めて乱暴な議論だと思うんです。沖縄の平和のためにグアムや北マリアナに基地を移せばいいなんて、日本の歴史を知っている人は言うてはいけません。しかし太平洋の島々の歴史が完全に周縁化されたなかでは、沖縄になればいいんだと、グアムに持っていけばいいんだ、パラオやマリアナに持っていけばいいんだとなってしまう。もっとトータルに太平洋の島々のコンテキストを私たちは考えなければなりません。それこそが日本に住む私たちの責務です。旧南洋植民地という大きな植民地を持っていたこの日本に住む我々が、このことを忘れてしまってはならない。だからこそ島々から今の日本の状況を考える、あるいは日米関係を考えるということをしていた

だきたいと思います。

予定より少し長く話してしまいましたけど、私が用意してきたのはここまでです。(拍手)

■質疑応答

【質問】

天皇皇后両陛下とマーシャル諸島その他の首脳との場面をどう解釈したらいいのかと。つまりあの場面を、「ああ、あれらの国は親日的なんだあ」という以外にどういう解釈が成り立つのでしょうか。

【矢口先生】

極めて難しい問いで、答えはないんですけども、旧南洋植民地の人たちと、僕もそれほど調査をしているわけではないので分からないですけども、話してみると、ある意味日本の占領時期に対するノスタルジアを持っている人たちがとても多いんですね。80代以上の人たちはあの頃はよかった、という語りをする人はかなりいます。その語りは、「日本の占領下にあったときはすごく社会の統制が取れていた。秩序が立っていた。きれいだった。みんな規則を守っていた。」それに比べてこのアメリカの影響下の社会は、それに比べて今の若者は、となります。「私たちが島民学校に行っていたときにはちゃんと人の言うことを聞いたのに、今の若者は全然だめだ」と。つまり、日本とアメリカの比較において、不思議なノスタルジアがあって、それがひとつの日本に対する親日感情の底流にあるように思います。ただ、じゃあ日本が大好きかという、そうでもない。もっと話していくと、私たちは島民学校にしか行かせてもらえなかった、つまり日本人と島民っていうのは全然違う学校で、日本人は高校までいくのに私たちは小学校までしか行かせてもらえなかったとか、よく日本人に殴られたとか。そういうようなコメントも出てくるわけですね。日本の植民地時代に対する極めて不思議なノスタルジアの意味を丁寧に考えなければならないわけです。表面的な言葉を捉えて日本の占領が良かったんだという人はいますけど、それはかなりの外的外れだと思います。

あとはやっぱり、島をめぐる現代の国際関係、僕はその辺り詳しくないんですけど、経済援助とかはととても大きいと思いますね。今日本の政府にとって、太平洋の島をめぐる権益、とりわけ中国との関係はすごく重要になっています。中国にいかにか負けないかということです。だから島サミットをやって太平洋の島々の

首脳を呼んだりしているわけですが、今マーシャルなんかに行くと中国が作ったサッカースタジアムがあったりするんですね。パラオっていうのは世界の中で、中国と国交がなく台湾と国交を持っている数少ない国なんですけど、それをレバレッジに台湾から多額の寄付をもらっているわけですね。橋とか大きなものは台湾が作っているんです。そういう国際関係の中でも考えないといけない。これらの国々というのは基本的にODA的な予算でしか生きていけないような経済構造になっている。産業はあまりないし、失業率は異様に高い。公務員率がものすごく高い。つまり、政府のお金で食べている人があまりにも多い。そういう経済構造のなかでは、日本なり中国なりに頼らざるをえない面も大きいのかなと、私は感じています。

【質問】

先生の島に対する関心をそこまで駆り立てるとするのは、ご自身のどういう経験からなのでしょう。

【矢口先生】

ありがとうございます。ちょっと私、自分の話をしますと、私はアメリカではインディアナ州という中西部の州の大学にいて、それからバージニア州という南部の州の大学にいて、全くハワイとは関係のない所にいたんです。実は大学を終えるまでハワイのことはほとんど考えたこともなかった。つまり、日米のことにはすごく関心があったけど、ある意味日本とアメリカというふたつの枠組みのなかで考えてしかなかったんですね。で、知り合いの研究者がハワイ大に就職をして、ハワイに遊びに行つてすごくびっくりしたというのが、一番のきっかけです。それまで私のハワイ観というのは、ビーチです。しかも旅慣れた人が行くところではないという感じもありました。しかし行ってみると驚くことがたくさんありました。例えば1898年までハワイというのは独立国家だったんですよ。ハワイ王国は1893年まで、そのあと共和国になり、そしてアメリカに併合されるわけなんですけど、立憲君主制の独立国家がアメリカの州になっている所って他にはありません。

移民の歴史から見てもハワイは極めて興味深い所です。私はインディアナとバージニアしかいなかったんで、ある意味「白い人」と「黒い人」しかいない所にいました。ハワイに行つて、こんなにアジア系が多い島は何なんだろうと思いました。そこからハワイに興味を抱いて勉強してみると、日米関係が違う形で見えてきました。それでそこから他の島に行つて、面白いなと思うようになってきたのが大きい理由です。

同時に私が教えているところでは、アメリカ研究の先生が何人もいますけど、みんなアメリカ本土のことをやっているんです。だから、もういいだろうと。もうちょっと違うところから考えたいなっていうのもあります。日本のアメリカ研究って、あんまりこういう視点で研究をしている人はいないんですよ。アメリカのアメリカ研究もそうです。でもこんなに何千キロも離れた所にアメリカが領土を持っているということを真剣に考えないといけない。アメリカ帝国論とか植民地論とか色んなことを理論的に、立派に語っている人は多いんですけども、もうちょっと丁寧に見ないと分かんないんじゃないかな、と思います。今、太平洋から見る歴史っていうのはある意味ちょっと流行っているという面もあって、随分いい本が、こういう色んな島々から国際関係を見るっていうのがここ数年でできてきているというのもあります。